

「日本の藤」探索記（一）

## 大分県三泊四日の旅

神野 幸人

（会員 鎌倉市立）

〔同窓会と大分〕

平成十三年十月四日（木・晴）

十時、大分空港に着いた。別府の特攻隊時代の上官田崎さんの仏前と、九十才の叔母を訪ねて生目神社の鳥居をくぐった。田崎さんの仏前に香を供し、奥さんと昔話に花を咲かせ、栗の一杯入ったササギの赤飯を御馳走になった。すぐ側の叔母を訪ねた。杖なしでは歩行出来ない叔母は、掃除機で台所を掃除していた。家族が働きに出た留守居の掃除とは感心しました。昭和十五年、小生の中学入学を祝して櫛の机を贈ってくれた。叔父の仏前に香を供し、お礼をした。

叔母は腰が曲がって歩行困難も、ベットに腰掛けての

対談は耳も良く元氣であった。記憶力も良く妻の妹や弟の嫁の死亡のこと等々、又、家族総員で大切にされて感謝の念に満ち足りた日々、特に息子は帰宅すると毎日体を拭いてくれる。裁判官の孫は叔母と離れづらく任地を大分に希望等々、幸福に満ちた顔であった。

田崎さんのお孫さんの車で湯布院温泉に向かう。狭霧峠・由布岳、秋空に聳える。田崎さんに厚く礼して金鱗湖畔の亀の井別荘に憩う。池のある部屋、濡れ縁の下、鯉集まりて口を開く。ふふを求めて期待に答える。

平成十三年十月五日（金・晴）

早朝、ふふを持って池に行く。大魚は食せず、小魚群れなして食す。アヒル五、六羽集まりて試食するも、まづいのか食せず。鰲沢に驚嘆した。

一両編成の電車で大分に向かう。大分県に国分寺があったとは知らなんだ。復旧された大屋根の葺が秋空に何かを語っていた。

佐伯に着いた。西田病院に大塚氏を訪ねた。一時過ぎの遅い彼の昼食時間を利用して、一時間ほど話した。我が家のおふくろのキャンクログの指の跡の話、露天風

呂の話等々幼い頃の思い出話を過ごした。病理に多忙の彼が長時間相手にしてくれたことに感謝して、鎌倉来訪を促して別れた。

大手前の笹屋に高橋聿子さんを訪ねて、昭和二十三年出郷の折、横浜の元先生に紹介状を書いて戴いた。ご尊父の谷口先生にお礼の伝言をした。五十五年後のお礼であった。聡明闊達な娘さん、佐伯の中心部の凋落を憂いて、再開発に奮闘の姿勢頼もしく感じた。鎌倉銘菓鳩サブレと食べ物記を贈って、先生に感謝のしるしに変えて別れた。

大分県立佐伯中学校一五会第十二回総会に出席した。昭和十五年に入學した同期生百五十人中五十数人が物故者になっている。四十人は集まるだろうと思っていたのに二十八人とは以外であった。集まったのは健康な証拠だと思った。六十年ぶりの人も数人いた。菅君もその中の一人であった。明日、先生の遺画の拝見をお願いしたところ快諾を得た。老人会も校歌の絶叫で、二次会も無く解散した。十七夜の月東天に浮かぶ時、宿に帰る。

平成十三年十月六日(土・晴)

姫野さん紹介の元学校校長、山本保先生を訪れました。

三十分の短い時間でしたが、穏やかな人柄に心和む一時でした。約束の時間を厳守して矢野彌生氏を訪れた。昨日の会で実兄の和生の死去を知り、お悔やみに香す。三十分ほど史談を話して、近くの菅宅を案内して戴いた。昨日の約束とて菅氏の丁寧な出迎えに恐縮す。たまたま猫、雀を捕りて功を客に饗す。一刻、先生の遺画に時を忘る。特に国木田独歩の“源をぢ”の主人公“紀州”の原画は貴重であった。又、鮎の挿話。貧してもこの絵だけは手放す勿れの“牡丹”の墨絵、娘像の油絵等々、日本画・洋画・漢詩と幅の広さに今更ながら感嘆しました。又、彼の人形劇の人形作りにも感嘆した。時なきを惜しみ、再訪を約す。先刻の猫、宴を終えて天に腹して泰平をひとり占めして寝る。ここは天国なり。

西寒多神社・宇佐神宮・定禅寺の藤

平成十三年十月六日(土・晴)

昨日、同窓会を終えた。午前中に山本保先生、矢野彌生先生、菅淳一氏を訪れ、佐伯の宝識を得た。

十五時三十分、大分着。清田賢氏調査の西寒多(ササムタ)神社の藤探索をした。敷戸交番の標識を右折する

と、大鳥居がある。

寒多川沿いに一キロほど行くと道の狭まる所、駐車場があり、豊後一の宮、国幣中社、西寒多神社の大石碑と萬年橋の石碑がある。県指定文化財の石橋を渡ると立派な社殿がある。創祀は遠く応神天皇九年（二七八）、西寒多山の山上に宮殿を建立。一四〇八年、現地に遷したと由緒書していた。藤は萬年橋を渡った左にある。

藤の記述が大分市の立て標識と神社のパンフレットとは違っているので併記する。樹齡（四〇〇）（四五〇）、幹径（一ト）（二ト）、枝張り（二二ト）、棚の広さ（三三平方ト）とばらばらの表示である。立派な幹は勢力がある。川沿いの好立地とはいえ、余りの勢力に疑問を抱く人がいたのか県指定になっていない。年輪のない藤の樹齡の判断は難しい。（余談、銚子の臥竜の藤もお寺のパンフレットには県指定とあるが、県教育委員の方から県指定ではないとの手紙を戴いた。小生も臥竜の名の由来も七五〇年と判断した樹医〇〇の立て札にも疑問は抱いたが）  
なにはさておき、大分県に立派な藤があつたことは嬉しいかぎりである。

萬年橋の所、川にカニを追う童子数人に別れを告げた。

むくの大木が地蔵を包む所、祠があり、その昔、寒多川氾濫の犠牲者の靈を慰む。大正十三年建立の大鳥居に数百羽のむくどりが、群れをなし、渡り旅の準備をしていた。清田氏のお陰で大分県の見事な藤を見せてもらった。厚く御札申し上げます。満足して海を一望する別府の宿で湯に浸かった。

平成十三年十月七日（日・晴）

八時三十分、安心院の盆地は狭霧に包まれていた。

九時、宇佐神宮は人影少なく、鳥の声賑やかなり。朱殿、朝日に映ゆ。靈池の異名の菱形池、藻を浮かべる水面には能舞台が優雅な姿を映している。

その能舞台の一隅に、かよわな幹の藤がある。イチイガシの森には不似合いか、棚は作ってもらっているが一片の説明もない。神宮でただ一本の藤。花見の候には心ある人を慰めてくれるであろう。

戦友香田君の情報の福岡県方城町の定禅寺に向かう。行橋から直方への国道を入った弁城の側道には車の姿がない。大きな溜池が或る所、小高い丘を貸し切ったような地形にお寺とは判じ難い民家のような建物、いぶかり

ながら緩いスロープを上がった。石柱に判じ難く定禅寺

とあった。その正面、境内と言うには狭い庭一杯に藤棚があった。幹の割れた数本の枝が四方に伸びていた。立

て札に、樹齡五〇〇年、幹回り三・七尺、藤棚の広さ八

〇〇平方丈とあり、県指定天然記念物、迎接の藤の石碑が建っている。迎接とは如何なる意か尋ねたかったが、

お寺は静閑として人氣がなかった。昔の寒村の面影漂う土地、藤も好々爺の氣配を漂わせていた。池の対岸より

の眺め、藤棚に浮かぶ白き壁、青き屋根、一服の絵なり。

地形を知らぬ土地、赤池町と書いた駅で車を捨てた。駅員は勿論、切符売り場もない駅。親切な人がいて汽車

は出た後、次便は一時間後と言う。駅前一台のタクシ

ーがいたので、直方まで頼む。途中、上野焼と記した煉瓦造りの煙突があった。ここは上野焼（アガノヤキ）の

土地とて窯場周りと洒落た。英彦山川の川向いの山麓に、二〇数件の窯元が広い屋敷に瀟洒な造りで点在していた。

その中の宗家、渡久兵衛窯を訪れた。十一代の当主は商売抜きの芸術師であった。妻は好品を求めて満足気であ

った。道に迷ったお陰で良い所を知った。門前の駐車場に日よけの藤棚があった。我が家の藤より小さいが、思

い出の里の藤であった。

## 地名のルーツ

◆惣作（本匠村上津川）

本匠村上津川や大分市東院には惣作という地名がある。これは同地を耕していた農民が欠け落ちしたため共同耕作をして税を納めねばならなかった田地のようで、農民の苦しみが象徴されているような地名である。

〔大分の地名〕梅木秀徳

◆アジロ（網代）—臼杵市以南の海岸部—

アジロ（網代）の地名は五十余カ所あり、ほとんどが臼杵市以南の海岸部に集中している。内陸部に網代地名のあるのは湯布院町川西だけである。漁のための見張り所、指揮所としての魚見、岡見地名もある。

〔大分の地名〕梅木秀徳

◆船隠（鶴見町大島）・風無・東風隠（佐伯市）

泊、波戸、船付、船繋、船繋、舟入、船隠などは水運地名であり、佐伯市の東風隠（コチカクシ）は東風の強いときに船を避難させる入江である。

佐伯市の風無（カザナシ）は風に影響されない良港である。臼杵市の風成（カザナシ）は国々海辺巡見帳に「風無は大泊より二丁、家二十五軒。湊、何風にもよし」と書かれており、昔は風無と書かれたが、無の字をさらって成の字に代えたものと思われる。〔大分の地名〕梅木秀徳